

風あげとマーケット

●資産運用の主人公は、皆さんです。

お金を育てることは **ギャンブル** ではありません。
また限られた人しか参加できない、限られた世界の出来事でもありません。

資産運用は日常生活の一部であり、それは個人の才能で行うというより、**技術を用いて行う継続的な作業**です。

(けっこう退屈で、忍耐力が必要です・・・)

資産運用の心得

1 早く始めること。

10冊の本より、1度の経験です。皆さんの経験は、のちのち立派な財産になります。また、「複利の効果」を得るためにも早く運用を始めることが大切です。

2 継続させること。

新たな運用原資は、工夫次第で毎月作ることが出来ます。コツコツ続ける「**積立て投資**」のイメージですね。

3 現実的な収益期待を持つこと。

例えば、『2年であなたの資産を10倍にする』というのは、非現実的な期待です。
長期保有 と **分散投資** を実践し、「収益性のお金」の6割程度を株式に投資するならば、インフレ率プラス5~7%ぐらいの収益率(リターン)を求めるのが、妥当な期待値であると考えます。

4 コスト、税金を厳しく管理すること。

短期売買を繰り返すと、知らず知らずのうちにコスト、税金の割合が膨らんでしまいます。コストを制する者が、資産運用を制する。
わたしは、そう考えています。

●運用のポリシーを決める

例えば皆さんが、自分のニーズに合わない金融商品を購入したり、短期的に金融商品の入替えをしたり、また、運用の政策（ポリシー）をしばしば変更したとして、

果たして、良い成果が期待できるでしょうか？

ポリシーとは、皆さんがお金を育てる上での「**行動指針**」であり、わたしはこれこそが、資産運用というマラソンにおいて、一番大切なことだと思います。

当事務所の資産運用に対するポリシー

1. 長期にわたる運用を旨とします。
2. グローバルな分散投資が基本です。
3. モダン・ポートフォリオ理論に則った、資産配分を行います。（後ほどご説明します）
4. 運用の道具として投資信託（ファンド）を用います。
5. インデックス・ファンドをメインに組み入れます。
6. コスト削減を重視します。
7. 国・地域として、中華経済圏をピックアップします。

皆さんの「お金を育てるポリシー」を決定する前に、ご自身のライフプランについて思い描いてみましょう。

資産運用は、皆さんの未来のために行うのですから、
皆さんの「お金を育てる目的」を明確にすることが大切です。

ひとりひとりの人生が違うように、お金を育てるプロセス、その計画の立て方もひとりひとり違う、つまり「テーラーメイド」であるべきと思いませんか？

●株式市場という「いちば」

歴史的データから、わたしは、

「株式こそが、長期運用に適した金融商品である」と考えます。

繰り返しになりますが、株式を買うということは、企業の一部を所有することです。つまり、企業のオーナーになることで、

その会社の利益成長の「果実」を得ようというわけです。

そこで、株式投資において、一般に正しいと思われることを列挙してみましょう。

正しいと思われる事柄

- 1 どの株式を、いつ頃、いくらで買うかを見定めるべき。
- 2 株式市場（マーケット）がいつ頃底を打つか、あるいは上昇するかを判断することができる。
- 3 マーケットが下がった時は、安全のため株式を売却して、マーケットから離れるべき。
- 4 マーケットが上昇した時は、利益を確定させるため、早めに株式を売却すべき。
- 5 売買を活発にするほど、利益を上げることができる。
- 6 メディアが発する情報は大いに信じて、積極的に活用すべき。
- 7 毎年の株式の収益率（リターン）は、前もって予測できる。
- 8 昨年の成績優秀株に投資すべきだ。
- 9 常にアンテナを張り、流行、旬の銘柄に投資する。
- 10 過去の株価から、あるいは過去の市場の動きから、未来を予測することができる。
- 11 一般の消費者にとって、株式投資で利益を上げるのは難しい。

いかがでしょうか？

わたしは上記の事柄はすべて **正しくない** という判断をしています。

株式市場という「いちば」は、何百、何十万という人々の思惑が入り乱れるところです。「いちば」の動きはその総意であり、一介の人間に「いちば」の短期的な意思がわかるはずがない、とわたしは考えます。

そのような「いちば」で短期的な売買をくり返しても、取引コストがかさみますし、消費者は取引をくり返せばくり返すほど、心理的思い込み（バイアス）を抱きやすくなる、と考えます。

（投資家の **感情リスク** といいます）

では、「いちば」の長期的な動きはどのようなのでしょうか。

繰り返しになりますが、株式市場は（選りすぐられた）企業の集合体です。

例えば、その国の経済が今後も成長を続ける、という考えに立てば、株式市場は（長い目で見れば）右肩上がりになります。

（今までは事実、そうでした）

●個別株式と投資信託

株式を用いて、お金を育てるとしましょう。

その場合、例えば、ひとつの銘柄A会社の株式を保有する、ということと、東京証券取引所の株式全部（つまり「いちば」全体）を保有することは、同じことなのでしょうか？

皆さんは、A会社の株式を購入することでA会社のオーナー、つまり「株主」になりますが、A会社には、A会社固有のリスクがあります。

個別企業のリスク

1. ビジネスリスク

例えば、ある新規事業で失敗し、大きな損失を出してしまうなど。

2. ファイナンシャルリスク

会社の財務上の困難、いわゆる資金繰りの悪化。

3. 突発リスク

例えば、代表者の急死、取引先の倒産など。

これらのリスクは、**非システムティック・リスク** と呼ばれ、その予測が困難ですし、将来の株式の収益率（リターン）に貢献するリスクではありません。

ですから、個別銘柄に見られるリスクを軽減するために、株式を用いてお金を育てる場合は、

株式のいちば、つまり「マーケット」全体に投資する、というイメージを持つことが大切です。

そこで **投資信託（ファンド）** が登場するわけですが、

投資信託は、**病気のお見舞いに持っていく果物**です。

と覚えてください。投資信託は一種の **パック商品** なんです。

果物のカゴの中に「債券」が入るのか、「株式」が入るのか、あるいは「不動産」が入るのかで、その商品性が違ってきます。

投資信託（ファンド）の特徴

1 リスクの分散ができる

ファンドを用いて株式を保有すれば、数多くの企業に自動的に分散投資できます。

2 バランス調整が容易

たいていのファンドは1万円から購入できます。ふつう、1口、2口という「口数」で

購入します。例えば、Bファンドを10口保有しているとしましょう。

ファンドという形で保有していれば、皆さんのマネーの状況に応じて、1口、あるいは2口のみを売却することができます。また、2口、3口と買い増しすることもできます。

3 運用の実際はプロに任せる

ファンドの場合、実際の運用は運用会社に所属する、ファンドマネジャーや運用チームに委ねることになります。もちろん、ファンドの価格は毎日変わりますから、「元本保証」はありません。

ここで、ファンドのチェックポイントを挙げてみましょう。

ファンドのチェックポイント10

1. 運用スタイルが一貫していること。
2. 運用を開始してから3年以上経過していること。(新発売のファンドは買わない)
3. 純資産残高が概ね30億円以上あること。
4. 頻繁な設定・解約、または純資産の大幅な増減がないこと。
5. 信託期間が原則として、無期限であること。
6. 運用会社の週間レポート、または月間レポートが入手できること。
7. 信託報酬が妥当であること。
(債券ファンドでは、1%以下、株式ファンドでは、1.6%以下)
8. 多大な分配金を出していないこと。
9. 分配金について、自動けいぞく投資ができること。
10. 運用会社の財務状況が健全であること。

●時間を味方につける

例えば、株式ファンドを用いて、マーケット全体を運用の対象にしたとしても、市場自体が下落することがあります。

これを **市場リスク** といいます。残念ながら、誰にも市場リスクを制御することはできません。

ファンドの価格が変動する、短期的に大きく下落するということは、（見た目には嫌なものですが）実は、皆さんに次なる収益の機会を提供している と捉えることもできるのです。つまり、

価格変動（リスク）こそが、将来の収益（リターン）の源泉である

という考え方ができれば、少しはマーケットとつき合いやすくなるのではないのでしょうか。

また、お金を育てる時間の単位を「最低5年」で持つことによって、今週、来月のマーケットの動きは気にしない、マスメディアが発する情報に踊らされない、という「心構え」ができます。

人の生き方にはひとつとして同じものはありませんが、「時間」は誰にも等しく与えられていますね。

その **時間を味方につけて、ファンドを長期保有する** ことが、資産運用の基本になると考えます。

また余談ですが、**お金を育てることは「風あげ」に似ています。**

最初は誰しも、風をうまく揚げることができませんよね。

特に風がない日に風を揚げるのは至難の技です。

走っても走っても風がぜんぜん揚がらず、地面にドスンと落ちてしまうこともあります。

しかし、一度軌道に乗れば、風は上空の気流に乗ってぐんぐん揚がっていきます。あとは風糸をうまく操作して、軌道修正をするだけです。

資産運用にも、そんなイメージを抱いてみてはいかがでしょうか。